

大槻 文彦 — 本格的な国語辞書をつくる —

明治維新後の新政府にとって、わが国の近代化を進めるためにやるべき仕事は山ほどありました。中でも国語を統一することが大きな課題であり、そのためには、本格的な国語辞書を急いで作るが必要でした。文部省（現在の文部科学省）は、さっそく高名な学者たちを集めて、辞書づくりに取りかかりました。しかし、議論ばかりでなかなか仕事が進みません。とうとう途中であきらめて、改めて若手の学者に任せることになりました。白羽の矢が立ったのが、当時仙台にできたばかりの宮城師範学校の校長をしていた大槻文彦でした。

文彦は、江戸時代後期の代表的蘭学者である大槻玄沢を祖父に、幕末期の開国論を指導した大槻磐溪を父に、弘化四（一八四七）年、江戸で生まれました。祖父玄沢は、現在の岩手県の南端に位置する一関藩の藩医でしたが、後に仙台藩の藩医に選ばれて江戸詰めとなり、以来大槻家はずっと江戸で暮らしていました。文彦が生まれたのは、玄沢が亡くなってから二十年も後のことですが、玄沢の洋学を取り入れようとする考え方は、磐溪を通して文彦に引きつがれ、文彦は英語をはじめとする洋学に通じていました。

日本語の本格的な辞書を作るには、まず、日本語が昔から現在まで実際にどのようなように使われてきたかを広く調べた上で、日本語の文法を正しく整理しなければなりません。そのためには、日本語と西洋諸国の言語とを比較し、日本語がどのような特徴をもっているかをしっかりとらえることが必要になります。

文彦は、今までだれもやったことのないこの仕事に、ただ一人で立ち向かったのです。明治八（一八七五）

白羽の矢：
多くの人の中から、
特にねらわれて選
び出されること。

蘭学者：
江戸時代に西洋の
学問を研究した人。

年二月に始め、約四万語を収めた国語辞書の原稿ができあがったのは明治十九年三月。実に一年の苦心の末でした。しかし、文部省はなぜか印刷に取りかからないまま時間がたっていきました。

明治二十一年十月、文部省から文彦がすべての費用を自分で負担するならば、この原稿を使って出版してもよいとの連絡が来ました。「この原稿を何とか世に出したい」文彦はそんな思いでさっそく私財をかき集め、出版に取りかかりました。

校正作業などで思わぬ時間がかかり、結局わが国初の五十音引き国語辞書『言海』全四冊の発行を終えたのは、二年半後の明治二十四年四月でした。前年の十一月には一歳の娘を、続いて十二月には妻を病気で亡くすという不幸にみまわれる中での完成でした。文彦は、足かけ十七年の道のりを振り返り、言海の奥書に「私の父(磐溪)がかつて祖父(玄沢)の戒めとして、事業というものはいい加減な気持ちで始めてはならない、決断して始めた以上はやりとげるまでは絶対やめないという精神がなければならぬ」と語っていた。私は、常にこの戒めを胸に刻んできました」と書いています。さらに、これで辞書づくりが終わるのではなく、これからも改良に努めていくという決意をも述べています。



『言海』の稿本
(仙台第一高等学校)

この大仕事を成しとげた後、明治二十五年四月、文彦は新設された宮城県尋常中学校の校長に迎えられました。初代校長として学校の基礎固めに力を注ぎ、三年半ほどを仙台で過ごした後東京にもどりましたが、その後も文彦は宮城県に心を寄せ続けました。災害の際には義援金を

私財…
個人の財産。

奥書…
書物の最後に発行のいきさつなどを記した文。

稿本…
手書きの原稿を写真にとったもの。

出し、旧仙台藩領出身の若者の育英事業に努め、仙台藩の歴史に関する本も数多く書きました。

大正元（一九一〇）年、六十六歳の年に、東京の出版社のすすめで、いよいよ言海の増補改訂に取り組むことになりました。再び辞書づくりに没頭する毎日です。高齢でしだいに体力も衰える中、どこへ行くにも仕事を抱えていきました。このころ、ある人に出した手紙に「言海の改訂作業も、毎朝七時から少しの休みも取らず夜まで続けている。さすがに夜九時ともなると、七十五歳の身は疲れて倒れそうになる」と書いています。そして「この手紙を書く時間もおしいくらいだ」ともつけ加えています。

昭和三（一九二八）年二月、文彦は、言海の改訂作業の完成を見ることなく、八十二年の生涯を閉じました。文彦亡き後、兄の大槻修二や関係者が作業を引きつぎました。そして、昭和七年から『大言海』四巻が刊行され始め、最終の索引の部が出て完結したのが昭和十二（一九三七）年、作業を始めてから二十五年の月日が流れていました。

文彦は、これほどまで辞書づくりに打ちこむ理由について、ある本の中で「一国の国語は、外国に対しては一つの民族であることの証拠となり、国内においては同胞としての一体感を固めるものである。国語の統一は、国の独立の基礎であり、目印でもある」と書いています。つまり、文彦にとって辞書づくりは、明治という新しい日本の国づくり、文化づくりそのものだったのです。こうした使命感こそが文彦を一心に辞書づくりに、そして、近代国家にふさわしい日本語づくりに向かわせたのでした。

文彦の一念は、鎖国の時代にあっても西洋の情報を積極的にわが国に広め、日本変革の先駆けとなった蘭学者玄沢、開国論を強く主張し、常に日本という国の正しい進路を求め続けた漢学者磐溪、この三代をつらぬく志でもありました。

増補…
書物の内容をおき
ない増やすこと。

改訂…
書物の欠点を直す
など内容を改める
こと。

同胞…
同じ国民、民族の
こと。

変革…
社会などを変え
あらためること。

先駆け…
同じ事を行って
いる人の先になる
こと。

文彦が宮城県尋常中学校の初代校長を務めていたころの教え子たちが、後に文彦を慕って、東京で文彦を囲む会を作りました。大正十四年、この会が文彦の喜寿を祝って、文彦に木彫りの胸像をおくりました。その胸像について会の代表である吉野作造が由来を記しています。その中で「初代校長として来任された大槻文彦先生は、深く全校生徒の敬慕を受け、また先生が生徒を見るのも真に肉親の子弟をみるようでありました」と文彦の人柄を書いています。

昭和四十四（一九六九）年、この胸像がブロンズ製となって、宮城県尋常中学校の後身である仙台第一高等学校に建てられました。以来、この学び舎の中で、文彦がこよなく愛した郷土の若者たちの成長を、日々静かに見守っています。



ブロンズの胸像
(仙台第一高等学校)

大槻文彦

大槻文彦は、弘化四（一八四七）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。宮城師範学校（現在の宮城教育大学）校長を務めた後、日本の初国語辞書づくりに携わり、十七年をかけて約四万語を収録した『言海』を完成させ、自費で刊行した。その後も、辞書の改訂作業に一生をささげた。

喜寿：
数え年七十七歳。

吉野作造：
大正時代の政治学者、思想家、大正デモクラシー（民主主義など）を唱えた。

敬慕：
尊敬され慕われること。